

Redburn 試論——幻滅と現実認識

厨 子 光 政

A Study of *Redburn*: Disillusionment through the First Voyage

Mitsumasa ZUSHI

ロンドンのベントリー社から 1849 年に出版された *Redburn* は、Melville の作家としての成長を窺わせるものの全くの不評に終わってしまった¹⁾、前作 *Mardi* がもたらした金銭的苦境から脱するために書かれたものであった。そのことは、Melville が義父の Lemuel Shaw に宛てた手紙(1849 年 10 月 6 日)に明らかに示されている。

For *Redburn* I anticipate no particular reception of any kind. It may be deemed a book of tolerable entertainment;— & may be accounted dull. . . . They [*Redburn* and *White-Jacket*] are two jobs, which I have done for money—being forced to it, as other men are to sawing wood.²⁾

Redburn に対する評価は大して期待してはいないが、とにかく売れる本でなければならなかった。それ故、コミカルなエピソードが多く盛り込まれ、しかも大方の読者が知らない海上の生活を紹介して読者の好奇心をくすぐる楽しい読み物となるはずであった。しかし、実際でき上がった作品は、Melville が約束した「ケーキとエールの味だけが漂う “amusing narrative”」³⁾にとどまらず、かなり深刻なテーマを含むことになった。William E. Sedgwick は “*Redburn* is charming. I am not sure that it is not the most charming of all his books.”⁴⁾と遠まわしな表現であるが、非常に高く評価しているし、また F.O. Matthiessen も、「*Moby-Dick* 以前に書かれた作品の中では最も感動するもの」⁵⁾と賛辞を惜しまない。

このように、Melville 自身望んでもいなかった好評が得られたのは、彼の抑制のきかぬ真摯な作家精神が溢れ出たためであり、さらには、後に *Moby-*

Dickのような大作が書けることを予期させる優れた作家としての素質が、その片鱗をのぞかせていたためでもある。

... some of us scribblers ... always have a certain something unmanageable in us, that bids us do this or that, and be done it must —hit or miss.⁶⁾

この抑制のきかぬパッション、しかもああしろこうしろと命令してやまぬパッションがあったがために、大衆受けのする読みやすい本を書こうとする筆におのずと勢いがつき、19世紀中葉に繁栄を極めつつあったリヴァプールの華やかな表面の下に隠れた、貧困に喘ぎ苦しむ世界を凝視する作家の目を隠しきれなくなったのである。

この論文では、大衆娯楽小説から高い評価を受けるほどの深みのある物語へと移行した過程を、語り手 Redburn と作家との2つの視点の二重構造と関連させながら論証し、さらに、発展という大義の背後に暗い影を落とす近代文明に対する、Melville の態度を考察することにする。

Redburn は、Melville 自身が船乗りとしてニューヨークとリヴァプールを往復したときの経験に基づいて書かれた作品であり、自伝的色彩の濃いものである。Melville はこの本のタイトルを *My First Voyage*⁷⁾ とするつもりだったほどである。しかしその中に描かれている船上でのでき事、リヴァプールでの見聞、その他のエピソードなどの、どこまでが実際の経験でどこからが Melville の想像であるか、あるいはどの部分が資料に拠るものかなどは、ほとんど明らかにされていない。⁸⁾ それ故、一人称の語り手 Redburn と Melville は同一人物であると同時に、両者が完全には重なり合わない部分、すなわち、Redburn という人物の性格・行動・考え方の中にフィクショナルな部分も、多少ではあるが存在することは否めない。しかも、Melville が貨物船セント・フローレンス号の水夫として渡航したのが1839年 (Melville が19歳のとき) であり、その経験談である *Redburn* の執筆に取り掛かったのが10年後の1849年の春であるということ、さらに、*Redburn* は Melville の第4作であることなどを考え合わせると、その10年間に作家自身が人間としても小説家としても成長し、19歳の青年当時とは人生観世界観が大きく異なっていることは容易に推察できる。それ故、19歳のときの無邪気で未熟な精神をいかに正確に思い起こしそのまま記述しようとしても、そこには何らかの無理が生じるのも必然であろう。

このように、語り手 Redburn と Melville は、いわば同一でありながら同一でないといった微妙な関係にあり、*Redburn* という作品の世界は、この微妙な関係の2つの視点から描かれているのである。そして、これら2つの視点のずれぐあい、あるいは重なりぐあいに応じて、読者は、*Redburn* の中に現れる数々のでき事を滑稽だと感じたり深刻に捉えたりすることになる。

これは、読者と語り手の心理的距離の作用と言い換えることもできる。一人称の語り手で展開していく物語においては、作中で起こるでき事はすべて語り手の視点で読者に紹介される。しかしながら、読者はそれを語り手と同じ視点というよりもむしろ作者の視点から捉える。従って、もし語り手と作者との視点のずれが大きければ、それだけ読者は語り手に共鳴しにくくなり、語り手との心理的距離が広がることになる。そのような場合は、語り手がどんな苦境にあろうと、読者は冷ややかな目でそれを受け止め、語り手の苦しむ姿がかえって喜劇的にさえ見える。逆に語り手と作家の視点が重なっている時は、作家の視点を追う読者の目は、当然語り手のそれと重なり、語り手と読者の心理的距離が縮まって、感情移入しやすい状態になる。語り手の苦悩がそのまま読者に伝わってくるのである。

この心理的距離を巧みに操作し、その効果を最もうまく利用している例のひとつが、14章 (He [Redburn] Contemplates Making a Social Call on the Captain in His Cabin) に見られる。Redburn は貨物船ハイランダー号に乗り込んだ当初から、乗組員の中で自分だけが上流階級の間人で、他の者は教養がなく粗暴で育ちの悪い人種だと自負するようになり、その違いを理解できるのは Riga 船長を除いて外にないと思い込んでいた。そこで、Riga なら、友人もなく孤立している自分を慰め元気づけてくれだろうと考え、船長と懇意な仲になるきっかけを作るため、表敬訪問しようとする。その出で立ちは、白いワイシャツ、布製のズボン (いつもは赤いシャツにズックのズボン) にパンプスを履き、さらにブラシをかけた shooting-jacket を羽織るといふ、奇妙ではあるが、少なくとも甲板上では “genteel figure”⁹⁾ となるようめかしこんだものである。ところが、船長室の前で一等航海士にその奇妙な格好を咎められる。そこで船長訪問の意図を説明したところ、大目玉をくらい、襟首をつかまれほうり出されてしまう。しかも、船長との会見が叶わなかったばかりではなく、そのような首尾の悪さに船員仲間からも嘲笑されるしまつである。このことを色々反省してみて、やっとな Redburn は “I had acted like a fool ; but it all arose from my ignorance of sea usages.” (p. 69) だと悟る。これだけでこの事件が終わるなら、読者は、海上のしきたりに不

案内な Redburn に同情し、船長を表敬訪問するという突拍子もない思いつきも彼の素朴さからくる善意の表われと思うであろう。しかし、彼の失敗はこれだけでは終わらない。船長訪問を試み一等航海士に叱られたその翌日、Redburn は、偶然、葉巻を楽しみながら甲板の上を行きつ戻りつ散歩している Riga 船長を見かける。前日の反省はどうしたのか、これぞ好機とばかりに船長に歩み寄り、社交辞令的挨拶をする。すると船長は、口もきけないほど怒り心頭に発し、恐ろしい形相で、かぶっている帽子を Redburn の顔めがけて投げつけるのである。一方、Riga 船長を礼儀正しく温情もありユーモアを解する好人物、と思い込んでいた Redburn は、狐につままれたような気がしてならない。自分の行為の何が船長の怒りに触れたのか全く見当がつかず、船長の態度は “rudeness for an act of common civility” (p. 70) ではないかといぶかるばかりである。船長は、実のところ、紳士どころではなく、ハイランダー号の乗組員と同じような粗暴な人間であると、Redburn に判ったのは、さらに数日後の夜、船が嵐に遭遇した時のことである。

. . . the captain rushed out of the cabin in his nightcap, and nothing else but his shirt on . . . began to jump up and down, and curse and swear, and call the men aloft all manner of hard names, just like a common loafer in the street. (p. 71)

身繕いもせず甲板に飛び出して来て怒鳴りちらし船員を罵倒する Riga 船長の姿を見て初めて、彼が自分の考えていたような善良な上流階級の人間でないことに気づくのである。

二度までも同じような失敗を繰り返す Redburn は、確かに気の毒のようでもあるが、それほど同情を寄せる気にはなれない。最初の経験から、自分は海上のしきたりに不慣れであると反省したのはいいが、それにもかかわらず、すぐ翌日同じ失敗を犯すとなると、素朴で純真な青年というよりは、単なる世間知らずの未熟者と言わざるを得なくなる。Redburn の立場は豪華客船の一等室の客ではなく、貨物船の一介の水夫、それも水夫の中でも “able-seamen,” “ordinary-seamen,” “boys” と三階級ある中の最も下位の “boys” のひとりなのである。それを忘れて、自分は教養ある紳士だという全く役にたたない高慢なプライドから、のこのこ船長に近寄り言葉を自分の方から掛ける行為が “an act of common civility” (前出) と言えるはずがない。もともと、“boy” から挨拶されたからといって、船長も激怒する必要はないし、Melville とてそのことを立派な誇り高い行為として描いてはいない。が、少なくともここでは、作者の目は、船長の横暴さを咎めようとするのではなく、

むしろ、Redburnが“common civility”と思っていることが、この場では決して正当なものではないことを強調しているのである。そうすると、初めの失敗の後の自己反省も怪しくなる。“I had acted like a fool; but it all arose from my ignorance of sea usages”（前出）という言葉は、馬鹿なまねをした自分を悔いているのではなく、実は、仲間から嘲笑された自分を、海上のしきたりを知らず行ったことだから仕方なかったんだと、自己弁護する欺瞞的態度の表われと考えられるようになる。

読者がRedburnに共感を覚えられず、彼の言葉を鵲呑みにしないのは、Melvilleが一人称の語り手Redburnと全く違った視点を持っていて、若い頃の自分であるRedburnを冷めたアイロニカルな目で見ている¹⁰からである。このように、作者が語り手と別の視点を保持することによって、読者と語り手の心理的距離を大きく引き離している時は、語り手が大真目であればあるほど、かえって滑稽にしか感じられない。そうすると、彼が失敗を犯して苦しむ姿は、もはや道化でしかない。

当人が真剣であるが故にかえってコミカルな姿に見える例は、前述の14章の外にもいくつか挙げられる。Redburnは、ニューヨークに着くと、その翌日、兄の友人の助けを借りて、どのリヴァプール行きの船に乗るかを決め、波止場に赴く。数多くの停泊している船の中からこれぞと思うのをひとつ選び、その船長と会って水夫として雇ってもらうように交渉する。その時、Redburnが信頼のおける人間であると印象づけようとして、良家の出であること、彼の父は由緒ある家柄の紳士で裕福な商人であったこと、をあまりに強調しすぎた。そのため、船に乗り込む身仕度のための費用を賃金の前払いの形で手に入れたかったのだが、「Redburnには裕福な家族がいるのだから、賃金の前渡しは必要ないでしょうね」（p. 17）と狡猾な船長に言われて返す言葉もなく、すごすごと引き下がるはめになる。この交渉が思い通りに進まなかったことに関しては、Redburnよりもむしろ、紹介役を務めた兄の友人の話の運び方がまずかったことに大半の責任があると思われるが、そうだとし、ても、船長をひと目見た瞬間、その外見に騙されて、Rigaこそ自分の船長に最もふさわしい善良な紳士と思い込んだことが、そもそも間違いだったのである。

As soon as I clapped my eye on the captain, I thought to myself he was just the captain to suit me. He was a fine looking man, about forty, splendidly dressed, with very black whiskers, and very white teeth, and what I took to be a free, frank look out of a large hazel eye. I liked him

amazingly. (p. 15)

上等な身なりも堂々たる髭も、実は、立派な船長然とした外観を装い、彼の本質とも言える狡猾さを隠すための物なのだ。飾り立てた外面を見て、単純にその本質だと判断してしまうのは、Redburnの目が極めて幼いことの証しに外ならない。その結果、相手を善人だと信頼し、裕福な商人の息子だと売り込んだ方法も手伝って、全く不如意な交渉となってしまう。この失敗談を語らせる Melville の視点は正にアイロニカルである。みじめな気分には落ち込んでいる Redburn を、冷たく突き離し、“Poor people make a very poor business of it when they try to seem rich.” (p. 17) と、現在形で、失敗の本質を見極めたような教訓めいた口調で付け加えているあたり、初めて渡航してから 10 年が経過した、Redburn 執筆時の視点が明らかに窮える。

結局、仕度金が手に入らなかった Redburn は、猟銃をできるだけ高い値段で処分し当座をしのぐことを決心する。この猟銃は、兄から餞別代わりに貰ったもので、ニューヨークで売りさばいて金の足しにするように言われていたものだ。偶然見つけた質屋に入り取り引きしようとするが、3ドルという安値をつけられて驚愕する。もっとましな質屋があるだろうと、別口を捜したところ、今度はさらに安い1ドルだと言われる。そうになると、前の質屋の言い値で取り引きするほうが得策だと思い、戻って行きその旨を伝えると、質屋の主人に、“Ought to have taken it [three dollars] when you could get it. . . . I won't give but two dollars and a half for it [the fowling-piece] now.” (p. 22) と言われ、うまく値切られる。これも、賃金の前払いをしてもらえなかったのと同様、駆け引きのまずさが原因の失敗であるが、Melville はここでもやはり、Redburn と距離を置いて遠くから静かに眺めることによって、読者の同情を得られない Redburn の未熟さ単純さを、前面に浮き上がらせている。

Mardi が不評に終わった後、Melville はとにかく大衆受けする売れる小説を書かなければならなくなったことは、冒頭で述べたが、その小説の準備途中で、イギリスの出版業者 Richard Bentley に宛てた手紙(1849年6月5日)に拠ると、Melville は、難解な要素を持たない、平易で単純かつ面白い読み物、ある紳士の息子(Melville 自身のこと)が初めて船乗りとして渡航した時の経験談、ただただケーキとエールの味のする小説を書くことを約束している¹¹⁾。そのような本の構想として、青年 Redburn が、世間知らずであるが故の失敗を繰り返す姿を、これまで論じて来たようなアイロニカルな目で描いていくことを、Melville は考えていたに違いない。

しかしながら、一人称の語り手 Redburn の視点と作家 Melville のそれを幅広く切り離すという手法は、*Redburn* 全体を通し終始一貫して用いられているわけではない。全般的に見て、作品の後半に近づくにつれて、二人の視点が重なるか、あるいは接近することが多くなるようである。*Redburn* 執筆当時の Melville の世界観が何かをきっかけに急激に変化し、Redburn もしくは 19 歳の時の Melville の世界観に近づいたと考えられる要素はないので、語り手 Redburn の物の見方考え方が、物語が進展するにつれて変わる、と解釈するのが妥当であろう。言い換えれば、Melville とは別の視点から世界を見ていた Redburn が、作家の世界観を代弁できる程度の高さまで昇り、Melville の視点に近づいて来るということである。

そう言えば、*Moby-Dick* においても、作品の途中で語り手の視点に変化が生じる。*Moby-Dick* にも、Ishmael という一人称の語り手が登場しているが、物語が進むにつれて、Ishmael の存在が薄くなっていき、その代わりに impersonal narrator が現れるようになる。その結果、Ishmael の目を通して作中のでき事が読者に紹介されていたものが、直接作家が読者に伝える形になる。この *Moby-bick* を語る視点の変化は、Richard Chase が指摘するように、ほとんど完成していた作品を、23 章以降大幅に書き直した¹²⁾ ことに因るところが大きいことは事実である。しかし、ここで見逃してはならないのは、ほとんど完成していた作品を書き直さなければならないほどの重大な要因が Melville の側にあったということである。書き直しの直接的引き金となったのは、1850 年 8 月 5 日の、ニューイングランドとニューヨークの文士が集まったディナーパーティーの席で、激しい文学論が闘わされたことと、そのパーティーで文人としての先輩 Hawthorne に出会った¹³⁾ ことであるが、そのことで触発されたのが、作家という人種の何人かが持っている抑えきれない “a certain something unmanageable . . . that bids [scribblers] do this or that” (前出) と極めて関係が深いもの、つまり作家としての情熱であることは間違いないであろう。Ishmael という一人の登場人物の視点だけから、壮大なエピックを語り尽すには限界があり、また、Melville 自身の内奥の声を作品に投影するには一人称の語り手の介在は、邪魔となって来た。その結果として、一人称の語り手が姿を消し、impersonal narration の作品と変わっていったのである。

Redburn においては、一人称の語り手という構造は最後まで保たれている。その意味では *Redburn* の語り手の視点は、*Moby-bick* のそれのような変化を呈してはいないとも言える。しかし、Melville とは違う視点を持つ語り

手 Redburn の幼稚な失敗談では満足できず、抑制できない作家としてのパッションと叫び続ける内奥の声を作品という形にするには、Redburn の視点を Melville 自身の視点に近づける必要があったことを考えれば、この視点の変化は *Moby-bick* に見られる変化と同等のものと考えられる。

Redburn の後半に近づくとつれて、語り手と作者 Melville の視点が接近すると述べたが、それはあくまで総体的に見て、二人の視点が後半になって近づく傾向にあるという意味であって、決して正比列的に図式化できるような単純なものではない。作品の初めの部分にも Redburn と Melville の視点がほとんど重なっている例が見られる。2章で、Redburn は、自分が母に別れを告げてニューヨークへと河を下る時の心境を、次のように説明している。

. . . she [Redburn's mother] thought me [Redburn] an erring and a willful boy, and perhaps I was ; . . . it had been a hardhearted world, and hard times that had made me so. . . . [All] my young mounting dreams of glory had left me ; and at that early age, I was as unambitious as a man of sixty. . . . Cold, bitter cold as December, and bleak as its blasts, seemed the world then to me ; there is no misanthrope like a boy disappointed ; and such was I, with the warm soul of me flogged out by adversity. (p. 10)

故郷を後にする時の Redburn は、60歳の老人のように、野心を抱くことなどおおよそできない。希望を失った今となっては、渡る世間は12月の寒風が吹き荒ぶ荒涼たる景色となって、彼の心から人間の温かさを打ち払い、厭世主義だけを育ててしまうのである。このような前途暗澹たる状況を Redburn に語らせる時、Melville は、彼を遠く突き離して静観する態度を保てなくなる。それは、19歳の若さでリヴァプールへの渡航を決心した時の心境には、10年経って思い起こしてみても、決して幼い感傷として片づけることのできない、生々しい重さ、苦々しさが残っているからである。前の引用に続けて、“these thoughts [of Redburn's] are bitter enough even now, for they have not yet gone quite away” (p. 10) と漏らしているあたり、Redburn に対する深い同情が明確に窺い見られる。

Melville 自身経験した苦境だということが、この同情の要因となっていることは否めないが、貧困に苦しむ人の姿は、Melville にとって個人的問題にとどまらず、さらに大きな近代社会の問題として捉えざるを得なかった。明

日への希望が何ひとつ見出せない下層階級の人々が、それでもどうにか生き延びようと、喘ぎ苦しむ姿は、発展を続ける当時の近代社会が落とす暗い影であり、同時に貧困を開放してくれるはずの、産業主義に基づく発展が露呈する矛盾でもある。このような問題意識を前面に押し出して、*Redburn* という物語を書く意図は、最初はほとんどなかったにもかかわらず、リヴァプールでの経験談を *Redburn* に語らせる時、Melville の作家精神がどうしても避けて通れない内奥から突き上げるパッションによって、筆に勢いがつき始めたのである。それ故、リヴァプール到着以降の *Redburn* の視点は、作家 Melville の内面の声をそのまま読者に伝えることができるまでに、Melville の視点に近づき、ここに来て、面白おかしい失敗談を積み重ねた「ケーキとエール」の味がする作品も、終わりとなる。

以上、語り手 *Redburn* と Melville との二人の視点の関係をもとに、二つの視点が織りなす綾と、Melville の創作の「意図と情熱とのずれ」¹⁴⁾ を考察して来たが、以降は、Melville の視点に近づいた *Redburn* を追うことによって、この作品の核とも言える、創作の意図を押し退けてまで流出して来た情熱の声を論じることにする。

「innocent な魂にとって現実とは幻滅の道である」¹⁵⁾ とは、*Redburn* の初めての渡航を通じての経験を、正に言い当てた表現である。F.O. Matthiessen も “The account of *Redburn*'s first voyage is a study in disillusion, of innocence confronted with the world, of ideals shattered by facts.”¹⁶⁾ と説明する通り、*Redburn* という作品が、「徹底した語り手の幻滅の書」¹⁷⁾ であることに、異論をはさむ余地はない。しかしながら、*Redburn* の経験する幻滅には二種類あることを見逃してはならないであろう。つまり、彼の無邪気な精神（これは無知に通ずるもの）が、初めて味わう海上の生活とその向こうに待っているヨーロッパに、あまりに期待を寄せすぎたために経験することになる幻滅と、すべての人間に幸福を平等にもたらすために近代社会の発展があるとする理想を、根底から覆すような現実を眼前に突きつけられた時に生じる幻滅との二種類である。

幼稚な期待が裏切られることに基因する幻滅を考えるには、*Redburn* が育った家庭環境を切り離してはならない。そもそも彼が船員として貨物船に乗り込むことになった原因は、次のように説明されている。

Sad disappointments in several plans which I had sketched for my

future life ; the necessity of doing something for myself, united to a naturally roving disposition, had now conspired within me, to send me to sea as a sailor. (p. 3)

彼の将来の夢を打ち砕いたのも、彼自身独立して何かしなくてはならなくなったのも、彼の父親が貿易商としての事業に失敗し、巨額の借金をしたまま死亡したからである。このような悲惨な状況にありながらも、Redburnは、海とその向こうに待つヨーロッパに“romantic charm” (p. 3) を感じてやまない。父親の仕事の関係上、Redburnは幼い頃から舶来の品に慣れ親しんできた。家にはヨーロッパから運ばれて来た調度品が並び、父親がパリで求めた油絵や古い彫刻版が壁を飾っている。ロンドンやパリで印刷された本がずらりと書架を埋め尽し、その中には、ヨーロッパの宮殿、城、庭園、田舎の風景などを紹介したカラーの画集もある。数多くの異国の品々に囲まれて育ったRedburnが、幼心にヨーロッパへの憧れを強く抱いたとしても不思議ではない。中でもとりわけ彼の心をヨーロッパへ誘ったのが、ガラスの船である。父親がハンブルクから持ち帰ったこの船は、居間のテーブルの上にガラスケースに入れられて飾られている。すべてがガラスで、わずか18インチの長さの船が本物そっくりに精巧に作られているだけでも、Redburnには大きな驚きであった。眺めれば眺めるほどその神秘的魅力が増してくるこの船の中には、何か金貨のようなすばらしい宝物が隠されていると考えるようになる。Redburnの抱いた異国への憧れが、ヨーロッパの伝統と歴史によって培われた典雅な面に端を発しているのみならず、父親と一緒に埠頭に立ち、ヨーロッパとアメリカを往復する船舶を楽しく眺めた懐かしい思い出があることを考えれば、彼が海について考えを巡らす時、その思考が一直線に海の向こうの旧大陸へと繋がったことも当然と言える。

... most of my thoughts of the sea were connected with the land ; but with fine old lands, full of mossy cathedrals and churches, and long, narrow, crooked streets without side-walks, and lined with strange houses. (p. 5)

異国情緒豊かなヨーロッパの文化に触れるという期待を持って貨物船の水夫となったRedburnには、幼児が宝捜しの探検に出かける楽しい空想に耽るような、心躍らせるものばかりであったに違いない。実際の航海につきまとう危険や不便は完全に忘れられていただろう。

とは言うものの、Redburnの期待が幼稚すぎるからといって、彼を責めることはできない。彼の父親が死ぬまで、現実世界の厳しさを全く知らされる

ことなく、安全を保証された温床の中で育ったのである。貿易商を営む裕福な紳士を父親とする Redburn は、その父親が与えてくれる “the gentle security”¹⁸⁾ を享受していた。また、彼が、the Juvenile Total Abstinence Association と the Anti-Smoking Society の会員であったことは、彼が世の中の悪から隔離されて来たことを意味している¹⁹⁾。このように、無菌室の中の純粹培養とも言えるような Redburn であるならば、彼が現実世界に対し、いかに免疫を持ち合わせていなかったとしても、その責任が彼ばかりにあるとは言えないであろう。しかしながら、現実世界が、無邪気な彼をそのまま受け入れてくれるほど、甘くないことも事実である。彼が現実世界に足を一步踏み入れた瞬間から、彼の甘い期待が次々と裏切られ、現実世界の中で生きることの厳しさを、直接肌で感じることになる。

Redburn の想像を絶する、強烈な現実が待ち受けていたのは、先ずは、船の上である。彼と寝起きを共にする船員は、彼がそれまで聞いたこともない汚い言葉で罵り合い粗暴な振舞いを見せる。自分が上流階級の出であることを誇りにしていた Redburn は、彼らは正に野蛮人としか思えない。ところが、船上での実際の生活や、帆・ロープの操作などの仕事の面では、彼の上品な育ちは役に立たないだけでなく、かえって邪魔になる。ここに至って、彼は初めて “the values of the shore are not those of the sea”²⁰⁾ であることを知らされる。食事の仕方から船の階級制度まで、すべてが彼の未知の世界でもあり、これまでの父親の庇護のもとでの経験や価値基準ではとうてい説明できないものばかりである。船上での新生活が、彼の捕われていた目を押し開き、固定していた内面の秩序をいやがおうでも揺さぶり始めるのである²¹⁾。自分だけの狭い固定観念に捕われていた者が、幻滅と現実認識を繰り返しながら、徐々に価値観を変えて行くというテーマは、決して目新しいものではない。しかし、Redburn の中に見られる価値観の転換は、単に小説の主人公の身に起こるだけでなく、作者 Melville が実際に経験したことであり、その結果、Melville の作家としての視野を広げる役割を果たしたということを考慮すると、Melville 文学の中でその意義が、多少なりとも、過小評価されてはならないように思われる。

さて、話を Redburn の幻滅と現実認識に戻そう。彼の甘い期待を打ち壊すのは、船上の生活だけではない。あれほどまでに憧れていた異国の地もまた、彼の期待を無残にも裏切ってしまう。およそ1ヶ月の航海の後、やっとアイルランドの姿が視界に入ってくるが、そこには異国を感じさせるものは何も見あたらない。次に現れるウェールズの山々も、アメリカのハドソン河に臨

むカーツキル山脈とほとんど同じである。やっと到着したりヴァプールの岸壁に立ち並ぶ薄汚れた倉庫の姿は、“a most unexpected resemblance to the ware-houses along South-street in New York” (p. 127) を呈し、期待していた “something strange and wonderful” (p. 124) な要素はどこを捜してもない。憧れの地を実際に見て “a sad and bitter disappointment” (p. 127) に捕われた Redburn は、“I might as well have staid at home ” (p. 124) と告白しているが、この幻滅は彼の無知と幼稚さとの結果である。子供心に描いていた、例の異国の趣をそのまま見出そうとするのが、そもそも無理な相談なのだ。従って、Melville も、このような失望を語る Redburn の姿を遠くから見守るだけで、同情は寄せていない。

ただ、ここで注意すべきは貨物船に乗り込んでからリヴァプールの港を見るまで、次々と期待を裏切られ続けた Redburn が、完全ではないにしろ、期待するという態度を改め、現実をあるがままに受けとめ、異国の情緒よりもむしろ真実を探ろうとする方向に向かい始めることである。その決定的引き金となるのが、Redburn が持って来た父親のガイドブックだ。彼はそのガイドブックを頼りに、父親の後を追って、かつて父親が歩いた通りにリヴァプールの街を散策しようと思っていたが、結局は、父親の使ったガイドブックは今では役に立たない無用の長物でしかないことが解る。要するに、“[The] Liverpool my [Redburn’s] father saw, was another Liverpool from that to which I . . . was sailing.” (p. 152) なのだ。現実世界は絶えず流動的に推移しているため、一定不変の単一の目で捉えることが不可能であるという、この認識を得て初めて、自分の目でリヴァプールの本当の姿を見つめることができるようになる。ここに来てようやく、Redburn の視点が Melville の視点に近づくことになる。

Redburn は6週間余りリヴァプールに逗留し、その間仕事のない時は少しでも多くを見聞しようと、街中を歩きまわる。その中で特に彼の心に深く印象づけられたのが、ランスロット＝ヘイ通りで起きた事件であった。ある日彼がランスロット＝ヘイ通りを歩いていると、大地の底から伝わって来る “endless wail of some one forever lost” (p. 180) と思われるか弱い泣き声が聞こえてくる。あたりを捜してみると、それは崩れかかった古い倉庫の地下室から発せられていることが判る。そこには、母親と二人の子供が、互いに抱き合いながら蹲っているが、三人は今にも飢え死にしそうで、弱々しい視

線を Redburn の方に向けるのがやっとで身動きひとつできない状態である。この世の物とも思えない光景を見て、彼は “What right had any body in the wide world to smile and be glad, when sights like this were to be seen?” (p. 181) と自問する。これには、Redburn の怒りも含まれているかもしれないが、むしろ、現実のものとはとうてい信じられないが、しかし厳然たる事実として存在する悲惨な状況に対する驚愕の方が大きいと思われる。ともかく、彼は誰か助けを呼ぼうと、近くでゴミ漁りをしている老婦たちに事情を説明するが、彼女たちには、自分たちが生きるだけで精一杯であり、他人の苦境に関心を寄せる余裕などない。そこで仕方なく、少し離れた通りにいる警官に瀕死の母子がいることを伝える。するとその答えは、“It’s none of my [the policeman’s] business. . . . I don’t belong to that street.” (p. 181) と取りつく島もない。

この警官の答えに要約されているのは、街の都会化・巨大化に伴う非人間性と、機能偏重型の分業化の見せる歪みである。個人個人の役割りが細分化された、ゲゼルシャフト的利害関係で秩序が保たれるような社会では、極論すれば、自分に課せられた仕事だけをつつがなくこなせば、それで十分である。そうになると、人間としての同胞意識、命の尊厳などは全く無視され、死というひとつの物理的変化が、他人の邪魔にならないひそかな場所で起こる限り、誰も干渉する必要はないという理論が成立する。

もちろん、Redburn はこのような理論に賛成できるはずがなく、警官の態度にも憤りを覚えるというより、ただ呆れるばかりである。結局、誰にも助けを求められなかった彼は、自分で水とパンを餓死寸前の親子の所に運んでやる。しかしながら、Redburn はこの善意の行為に満足するわけにはいかない。なぜなら、彼が救い得たのは、親子の一時的飢えであり、問題の抜本的解決には何らなっていないからである。それどころか、自分の親切により、三人の苦痛を、一日分余分に延ばしたのではないかと後悔するほどである。この上ない無力感に打ちひしがれる中で、Redburn はふと “an almost irresistible impulse to do them [the mother and her children] the last mercy, of in some way putting an end to their horrible lives” (pp. 183-84) を感じる。もし、殺人を悪として罰する法が存在しなければ、おそらく親子を殺しその苦痛から解放してやっただろうと述懐する Redburn の呻きは、そのまま Melville の嘆きとして聞こえてくる。

周りを “the wants and woes of our fellow-men” (p. 184) に囲まれながらも、その人達の苦悩には目をつぶって、自分の快樂に耽る人間の集団、それ

がリヴァプールの真の姿なのである。産業主義に基づく社会の発展は、人間の幸福を約束するものでなければならない。それには何よりも先ず、貧困に苦しむ人間をなくす必要があるはずだが、近代社会の発展は逆に、貧富の差を広げる方向に突き進んでいる。このような矛盾を孕んだ近代社会の典型として、1840年代当時「産業文明の最先端をゆく」²²⁾リヴァプールが描かれていることは疑いない。

そうすると、Redburnが6週間のリヴァプール逗留中に直接経験したものは、彼が期待していた異国情緒の欠落とといった程度の幻滅とは次元の異なる、貧富の差を野放しにする近代文明社会そのものへの幻滅、産業文明の根本的存在意義への懐疑ではなかろうか。

貧困の中で喘ぎ苦しむ同胞を救う能力が、一人一人の人間にないとすれば、天に向かって、“some angel might descend, and turn the waters of the docks into an elixir, that would heal all their woes, and make them . . . healthy and whole as their ancestors, Adam and Eve, in the garden” (p. 188) と祈る以外方法は残されていないことになる。しかし、現実問題として、天使が海水を万能薬に変えて、極貧に苦しむ人々を、地上の楽園に住んでいたアダムとイブのような健全な人間に作り変えることを望むとも、真剣に期待するわけにはいかない。だとすれば、天に祈る行為は、人間自らが作り出した矛盾を自分の力では解決できないという、諦めにも似た、悲しい幻滅の表われと言えよう。

ニューヨークへの帰りの船の上でも、Redburnは、貧富の差が作り出す非人間的階級差別を見せつけられる。ハイランダー号には、約500人の移民と15人ほどの一般客 (ladies and gentlemen) が乗り合わせているが、移民達は、奴隷船で運ばれる奴隷さながら、明り窓も通風口もない倉庫のような場所に、足の踏み場もないほど詰め込まれている。それに対し、一般客は、それぞれ個室を与えられ、ひと声かければすぐ使い走りとなってくれる接客係もいる。悪天候が2・3日続けば、移民の部屋は汚水溜めのような有様になり不衛生極まりない。甲板とて、広々と空いている場所は一般客専用で、移民が利用を許されているのは、ポートや樽や円材などがごたごたと並んでいる一区画に限られ、しかも、それらふたつの場所はロープで仕切られている。人権を無視したこのような差別の源は、すべからず船賃の3ポンドと20ギニー (21ポンドに相当) の違いなのである。

アイルランド南端のクリアー岬の沖を抜けて20日ほど過ぎた頃、1週間余り断続的雨が続き、ごみ溜めと化した移民の部屋で、果して、悪質な熱病が

発生する。伝染の勢いが強く、次々と感染者が出てくる有様なので、船長は、一船客の中の医者に治療を頼むが、その男は自分が接触感染するのを恐れるあまり、自分は医者ではないと言い張って、移民の部屋に入ろうとしない。そうこうしているうちに死者が続出するようになる。一方暢気な旅を楽しんでいる一般客は、移民の苦しみには全く無関心である。何らかの関心があるとなれば、それは、熱病が自分達の船室まで感染しないよう気をつけるという、無関心よりさらに冷酷な関心だけである。

We talk of the Turks, and abhor the cannibals ; but may not some of *them*, go to heaven, before some of *us*? We may have civilized bodies and yet barbarous souls. We are blind to the real sights of this world ; deaf to its voice ; and dead to its death. (p. 293)

飢えに苦しみ病氣と闘わなければならないという、愴ましい現実に目をつぶり、助けを求める悲鳴に耳を貸さず、死に対しても無関心でいられる人間に、未開の原住民を非文明人として蔑むことがどうしてできようか。表面ばかりいかに飾り立てて立派に見えようとも、その心の中に人間としての温かさ優しさがなければ、野蛮人以下であり、そのような人間が集まってできた文明社会には、原始社会ほどの幸福もとうてい存在しない。

人喰い人種のタイピー族と生活を共にしたことのある Melville は、その経験を通して、未開の原住民の方が文明人よりも、理想的樂園にはるかに近い社会を築いていることを知った。そこには悲しみや労苦や悩みの種となるものは一切見あたらず、貧困、乞食、負債、借金取りといった、近代文明社会の矛盾の一端を窺わせるものも皆無である。Melville は、文明社会と原始社会との決定的違いは、金銭つまり “root of all evil”²³⁾ が存在するかしないかに因るとしている。

1853年に発表され、当時流行していた超絶主義者達の楽観主義に対し、Melville の懐疑的態度を示した²⁴⁾とされる “Cock-A-Doodle-Do!” の中で、19世紀の産業の発展の中心的担い手であった鉄道は “the facilitation of death and murder”²⁵⁾ であり、その上を機関車という名の鉄の悪魔は、250マイルも走るのにもかかわらず、なおも “More! more! more!”²⁶⁾ と叫んでいるように聞こえると、非難を込めて描写されている。また、1854年に書かれた “Happy Failure” という、10年の歳月をかけてやっと発明した排水装置の試運転を行う男の話がある。その装置は1時間で1エーカーの沼や沢の水を汲み出すという大発明だが、結局この実験は失敗に終わり、その結果主人公はやっと人間としての優しさを取り戻すという、たわいない話であり、そ

のテーマも“Happy Failure”という逆説的意味を持つタイトルに集約されている。が、ここで注意したいのは、成功すれば、不朽の名声と栄光をもたらしてくれるはずだった排水装置は、内部構造が複雑怪奇で、多種多様のパイプやポンプが絡み合っているところから“a huge nest of anacondas and adders”²⁷⁾と描写されていることである。人間の知恵を駆使して作り出した装置が、人間を殺し呑み込んでしまう大蛇のイメージで語られているのは、要するに、この主人公は実験に成功したら、この大蛇に呑み込まれて益々人間らしさを失ってしまうことを暗示しているのである。

人間を幸福へ導いてくれると信じて機械文明の発展を望むのではあるが、その機械文明はいつのまにか人間を死に迫りやる怪物と化してしまう危険性がある。Redburn がリヴァプールで垣間見たのは、このような人間性の欠如による「機械文明の行きつく果て」²⁸⁾だったのである。

産業の発展と都市の繁栄という美名のもとに落とされている暗い影に大きな衝撃を受けた Redburn ではあるが、彼がリヴァプールで見つけたものは、“the cold charities of the world” (p. 213) だけでなく、もちろん人間の優しさに触れることもあった。全く面識のない自分を、偶然庭の前を通りかかり挨拶程度の言葉を交わしただけで家に迎え入れ昼食までごちそうしてくれた、温和な田舎紳士もいた。このような心安まる観迎を受けたことが、19歳当時の Melville の実際の経験であったのか、それとも *Redburn* 中の fiction の部分なのかは、判別しようもないが、いずれにせよこのことから、Melville が、世の中には暗黒の面と同時に陽の当たる面が存在するという事実を決して見逃していないことが判る。

青く晴れ渡った空の色を映し、人の心を夢幻境へと誘うこともあれば、その直後に大荒れとなって航行中の船を転覆させる海は、“a garden spot for barnacles, and a playhouse for the sharks” (p. 103) である。長閑な楽園でありながら殺人鬼が隠れ棲むという海のイメージは、Melville 文学を通して、再三再四繰り返され使われている。地上の世界も同じで、「明」と「暗」が共存していることは十分知りながら、それでも楽観主義的に「明」の部分を強調することによって「暗」に目をつぶることはできなかった。ここに、Melville が最終的にペシミズムの道を進むという悲劇の源が感じられると同時に、ひとつの「暗」あるいは矛盾を見つけたら、そのままでは容認できず、その根源を徹底的に探ってやまない、彼の不屈の精神を見る思いがする。

Melville の友人であり出版業者でもあるダイキック宛てに書いた手紙（1849年12月14日）の中で、Melville は “I hope I shall never write such a book [as *Redburn*] again”²⁹⁾ と告白している。この言葉には、金儲けのために大衆受けすることを目指して小説を書いたことに嫌気がさし、たとえ *Redburn* の売れゆきが良く好評を博していても、それを善しとせず、*Moby-Dick* 以降の作品群へと向かう、Melville の一代決心が示されている。

〔注〕

- 1) Leon Howard, *Herman Melville*, University of Minnesota Pamphlets on American Writers, no. 13, rev. ed. (1961; rpt. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1971), p. 11 を参照。
- 2) Jay Leyda, *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville 1819—1891*, rev. and enl. ed. (1951; rpt. New York: Gordian Press, 1969), Vol. I, p. 316.
- 3) *Ibid.*, p. 306 を参照。
- 4) William Ellery Sedgwick, *Herman Melville: The Tragedy of Mind* (1944; rpt. New York: Russell and Russell, 1962), p. 62.
- 5) F.O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (1941; rpt. New York: Oxford University Press, 1977), p. 396 を参照。
- 6) Jay Leyda, p. 306.
- 7) Leon Howard, *Herman Melville: A Biography* (Los Angeles: University of California Press, 1951), p. 133.
- 8) Hershel Parker, “Historical Note,” in *Redburn: His First Voyage*, Vol. IV of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston: Northwestern University Press, 1969), p. 323 を参照。
- 9) Herman Melville, *Redburn: His First Voyage*, Vol. IV of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston: Northwestern University Press, 1969), p. 68.以下、本稿におけるこの作品からの引用はすべてこの版に拠り、本文中で()内にそのページ数を示す。
- 10) 林信行, 『ハーマン・メルヴィル研究』〈増補版〉(南雲堂, 1974), p. 55 を参照。
- 11) Jay Leyda, p. 306 を参照。
- 12) Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (1957; rpt. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1980), p. 94 を参照。
- 13) Leon Howard, *Herman Melville*, p. 19—20 を参照。

- 14) 神原達夫, 『孤独な遍歴——ハーマン・メルヴィル考——』(ごびあん書房, 1975), p. 54.
- 15) 林信行, p.55.
- 16) F.O. Matthiessen, p. 396.
- 17) 杉浦銀策, 『メルヴィル——破滅への航海者——』(冬樹社, 1981), p. 29.
- 18) Charles J. Haberstroh, Jr., *Melville and Male Identity* (New Jersey: Associated University Presses, Inc., 1980), p. 77.
- 19) A. Carl Bredahl, Jr., *Melville's Angles of Vision* (Gainesville: University of Florida Press, 1972), p. 16 を参照。
- 20) *Ibid.*, p. 19.
- 21) 酒本雅之, 『沙漠の海——メルヴィルを読む——』(研究社, 1985), p. 39 を参照。
- 22) 杉浦銀策, p. 18.
- 23) Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life*, Vol. I of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston: Northwestern University Press, 1968), p. 126.
- 24) R. Bruce Bickley, Jr., *The Method of Melville's Short Fiction* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1975), p. 62 を参照。
- 25) Herman Melville, "Cock-A-Doodle-Do!", in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, Vol. IX of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston: Northwestern University Press, 1987), 270.
- 26) *Ibid.*, p. 270.
- 27) Herman Melville, "The Happy Failure" in *The Piazza Tales*, p. 258.
- 28) 杉浦銀策, p. 30.
- 29) Jay Leyda, p. 347.